



首里城復元で大龍柱の向きは相対と暫定決定 — 一国の「検討委員会」報告会の報告 —

後田多 敦

(非文字資料研究センター 研究員)

はじめに

焼失した首里城正殿などの復元に向け検討を進めている国の「首里城復元に向けた技術検討委員会」(高良倉吉委員長)(以下、検討委員会)が2022年1月30日、復元の方向性や経緯を説明する報告会を沖縄県立博物館・美術館で開いた。復元の焦点の一つ正殿大龍柱の向きについて、検討委員会は2021年12月に、暫定としながら「平成復元」と同じ相対とする方針を公表していた。相対向きが採用された根拠を確認するため、報告会に出席した。報告会を紹介し問題点などを整理したい。

論点の背景

首里城は琉球国の王城で、明治政府が1879(明治12)年に接收し、日本軍が管理・駐屯し利用した後は建物から段階的に払い下げられた。そして、学校などに利用されたほか、大正末期には沖縄神社が創建され、正殿は神社拝殿となった。また、1945(昭和20)年の沖縄戦時には、沖縄守備軍32軍司令部壕が地下に建設された。そのため、日米の戦闘で壊滅的に破壊された。戦後は米国統治下で琉球大学が置かれたあと、沖縄の「日本復帰」20周年記念事業の一つとして、1992年に正殿などが復元・公開された(「平成復元」)。その後も復元は進み、2019年には全域の復元が完成した。ところが、同年10月31日未明に正殿から出火、正殿など7棟が焼失した。報告会は焼失後の修復・復元方針などを説明するため開催されたものである。

大龍柱は正殿正面石階段の上り口両側に立っていた造形物。平成復元では、琉球国時代の正殿重修記録「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」(1768年、沖縄県立芸術大学蔵、以下「寸法記」)や那覇市蔵の尚家文書(「御普請絵図帳」、以下「絵図帳」など)(1846年)で、大龍柱が相対向きで描かれた絵を根拠に相対向きに設置された。しかし、本来は正面向きだとする異論が多くあった。2019年の焼失を受けて、向きが改めて焦点となっている。

筆者は2020年11月、インターネット開催の学会でフランス人ルヴェルトガが琉球国末期の1877年に撮影した正殿写真の存在を紹介した。写真に写る大龍柱は、正面向きだった。平成復元では、1879年の置県後に正面向きに変更されたとしていた。この大龍柱向き変遷の

理解は、ルヴェルトガ写真で誤りだったことが確定した。前提が否定された相対説は、1846年から1877年までの間に向き変更の事実を新たに示す必要が出てきた。その中で、検討委員会が「暫定」としながらも相対向きと決定したため、提示されるだろう「新事実」と「新資料」に関心が集まった。報告会が注目されたのは、そのためである⁽¹⁾。

検討委員会の報告会の概要

1月30日に開催された報告会は、コロナ禍を理由に予約制で人数を制限していた。検討委員会委員が登壇するので、疑問点を確認するため筆者も参加した。受付番号は「018番」。しかし、直接の質疑応答は行われず、質問を書いた紙を回収することが会場で説明された。検討委員会委員と参加形態などは以下⁽²⁾。

検討委員会

委員長：高良倉吉琉球大学名誉教授

委員：安里進沖縄県立芸術大学名誉教授

委員：伊従勉京都大学名誉教授＝Zoom参加

委員：田名真之沖縄県立博物館・美術館館長

委員：波照間永吉沖縄県立芸術大学名誉教授

＝コロナ検査陽性で欠席

委員：室瀬和美東京藝術大学客員教授＝Zoom参加

報告会では、最初に森口俊宏内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所長が「復元経過の報告」を行い、その後に高良委員長、安里委員、伊従委員が報告した。委員報告では、関連資料での推論による説明が繰り返されたが、焦点である1846年から1877年までの間に、大龍柱の向きが変更された事実や資料は提示されなかった。検討委員会はルヴェルトガ写真と相対説との矛盾を解決できていなかったのである。

検討委員会の説明など

高良委員長の報告会レジュメから結論部分を紹介したい。高良委員長の説明は、検証と結論の理論的整合性が欠き、文章としても成立していない。そのため要約が困難なので、長くなるが検討結果と結論部分などをそのまま紹介する。引用文の下線は筆者が引いた。沖縄総合事

務局ホームページで、本人の資料全体も確認してほしい。

II 令和復元に際しての新たな資料や知見の確認と検討

(1) 復元対象年代については、『1712年に再建され、1925年に国宝指定された正殿の復元を原則とする。』との趣意に鑑み、正殿に関する建築様式等の変遷を把握した上で、根幹的な資料である首里王府の記録「寸法記」（1768年）や「御普請絵図帳」（1846年）等の尚家文書に依拠しつつ、昭和初期の解体修理記録とそこに至るまでの諸情報を活用する、と確認した。

(2) 古瓦や漆芸技術、建築意匠、絵画などに関する最新の知見が提示されており、それに基づいて平成復元を見直す作業を行った。

III 検討結果

検討結果の要点を、大龍柱の向きに絞って整理すると以下の通りである。

(1) フランス海軍古写真（1877年）の正殿と、「寸法記」（1768年）や「御普請絵図帳」（1846年）が描く正殿は、形態や仕様、規模などすべての面でほぼ一致した。ハの字形に開いた階段やその段数、大龍柱やそれが載る台石も同様である。

異なるのは大龍柱の向きのみである。右側の大龍柱（阿形）の胴体には、何らかの理由で損壊し、その部位を補修した痕跡を確認した。

1874年（明治7）に大地震がありその後も余震が続いたという記録（喜舎場朝賢『琉球見聞録』）はあるが、損壊の事実を特定できなかった。

(2) 王府絵師たちが同時代に描いた業務上の絵図資料、例えば「貝摺奉行所文書」中の漆器製作図案、「御冠船之時御道具之図」中の各種道具の製作図、「火花方日記」中のからくり火花台図などで明らかかなように、一定のレベルの図法技術を持っていたことが確認できた。この技術は、「寸法記」（1768年）や「御普請絵図帳」（1846年）においても発揮されており、正殿各部を描写する図法に活かされている。正面向きの大龍柱を描くのが困難だったために、便宜的に向き合う姿勢として描いたという推測は成り立たない。

(3) 文献記録の検索については、9名の琉球史研究者が分担を決め、尚家文書や関連記録などほう大な資料を調べた。現時点では、大龍柱の向きに変更を加えたことを示す明確な記述は見出せなかった。

(4) 遺物・残欠の検討に関しては、大龍柱の変遷は従来知られているよりも複雑であり、正殿の建築様式等の変遷の問題を含めて、引き続き調査・研究が必要なることを確認した。

IV 暫定的な結論

上記の検討結果をふまえた上で、令和復元においても、大龍柱の向きは平成復元を踏襲することとした。

(1) フランス海軍古写真と「寸法記」「御普請絵図帳」はほぼ一致しているが、正殿の内部や外部の仕様、つまり細部にわたる総体としての正殿を魅了させるための根拠資料としたのは後者であり、大龍柱の向きについてもそれに依拠することとした。フランス海軍古写真が示すのは正殿の外観である。

(2) ただし、「御普請絵図帳」（1846年）からフランス海軍古写真（1877年）に至るまでの30年間ににおいて、大龍柱の向き等に変更が加えられたと考えられるので、その経緯や理由を示す説得的な資料および認識が提示されるならば、上記の結論は再検討される。今後の学術的な議論を期待するが故に、今回の決定は暫定的な結論であることを確認しておきたい。

検討委員会は、1846年から1877年の間に向き変更があった事実を確認できなかったことを認めた。しかし、ルヴェルトガ写真との矛盾を解決できないまま、相対向きを維持した。その結果、ルヴェルトガ写真よりも、「寸法記」などの絵の大龍柱の向きが優先されることになった。検討委員会は、向き変更の事実を示せなかったばかりでなく、説明できない「矛盾」を平成復元よりもさらに広げた。

高良レジュメには「復元対象年代一覧表〔仮称〕」が付されており、拡大した「矛盾」を取り繕うために「復元対象年代」をさらに細分化して「中核となる年代」を設定し、対象年代を使い分けすることで資料を選別し、正殿ではルヴェルトガ写真の資料的価値を排除する方法が採用された。（高良資料の一覧表は対象年代の範囲に1945年まで含めているが、本文からすれば誤りだろう）

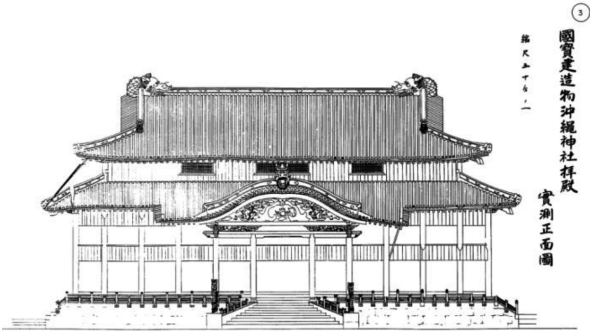
検討委員会の検証と判断の問題

平成復元では「1712年に再建され、1925年に国宝指定された正殿の復元を原則とする」との方針が採用された。そして、「寸法記」と沖縄神社拝殿としての昭和修復時（1928～33年）の記録（図版②はその際の実測図）が重要な資料となった。特に昭和修復時の資料が重要な役割を果たしたことも忘れてはいけない。

安里委員は「私の役割は、平成復元が妥当だったか否かを、学術的に検討することだと考えている」（安里委員レジュメ）としながら、平成復元は適切だったと説明した。しかし、置鼎後に正面向きに変えられたとする平成復元的前提は誤りで、1877年には正面向きだったのである。現段階で、大龍柱は1877年から1925年まで正面向きだったことが分かっている（図版①と②）。図版①は1877年のルヴェルトガ写真を基にした図版で、大龍柱は正面向きだ。平成復元ではこの図版の成立



Le château royal à Shuri. — Dessin de G. Vaillier, d'après une photographie de M. J. Revertégat.



①
国寶建造物沖縄神社拝殿実測正面図
築天永年二
実測正面図

上・図版①：M.Jules Revertégat (1882) UNE VISITE AUX ILES LOU-TCHOU. LE TOUR DU MONDE, 2,254. Paris.

下・図版②：「国宝建造物沖縄神社拝殿実測正面図」（『首里城関係資料』沖縄開発庁 沖縄総合事務局開発建設部、1987年）

過程や内容を誤読し、資料的価値を否定していた。しかし、ルヴェルトガ写真で図版を誤読していたことが確認された。

また、大龍柱が正面を向いている伊藤勝一収集「正殿写真」は、平成復元段階では最古の写真だったが資料的価値を否定されてきた。理由は不明。ルヴェルトガ写真で、伊藤勝一収集「正殿写真」の資料的価値も確定し、正面説の資料理解が正しかったことも証明された⁽³⁾。安里委員は、これらの近代における向き変遷に対する平成復元での誤解、また古写真・図版の誤読を認める必要があった。なぜなら、平成復元では、明治大正期の古写真や昭和修復時の図面も活用されたからである。平成復元での誤読の検証を行わなかったため、今回も資料から都合のいい部分だけを抜き出すことになった。

検討委員会は今回の復元を〈復元対象については、「『1712年に再建され、1925年に国宝指定された正殿の復元を原則とする。』との趣意に鑑み、正殿に関する建築様式等の変遷を把握した上で、根幹的な資料である首里王府の記録『寸法記』（1768年）や『御普請絵図帳』（1846年）等の尚家文書に依拠しつつ、昭和初期の解体修理記録とそこに至るまでの諸情報を活用する、と確認した〉と説明する。しかし、これでは1877年に大龍柱が正面を向いていた事実との矛盾はどうなるのか、答えていない。

検討委員会の検討作業の問題

検討委員会の検証作業は、多くの矛盾を抱えている。平成復元でも課題はあったが、それは資料不足などの制約が大きな要因で史実に対する「真摯さ」はあった。しかし、令和復元では資料の「黙殺」「恣意的利用」や「論点すり替え」などがなされ、「真摯さ」が感じられない。これを如実に示したのが説明会だった。幾つか事例をあげておきたい。

①疑問・質問に答えない。

大龍柱は1877年段階で正面向きだった点は確定しており、「寸法記（1768年）」「絵図帳（1846年）」を根拠に相対向きを採用するなら、1846年以後に正面向きへ変えられた事実を示す必要がある。しかし、検討委員会はこの基本的問いを解決していない。大龍柱はいつ相対に変えられたのか。検討委員会は相対向きの矛盾という基本的な問題に答える必要がある。

首里城再興研究会（共同代表：友知政樹）、絵図から考える首里城の会（代表：佐久本伸光）、首里城正殿大龍柱を考える会（代表：大田朝章）の3団体は2022年1月7日付で、沖縄総合事務局と検討委員会に公開質問状を提出した。検討委員会が2021年12月1日に暫定ながら相対向きと決めたことに対し、具体的な論拠や資料などを求めたものである⁽⁴⁾。

これに対し、総合事務局から報告会で説明すると連絡があったという。しかし、報告会では公開質問に対する回答はなかった。筆者は公開質問の作成段階で質問を出していたので、説明会では重複を避け当日の説明に対応したメモ書きを提出した。そのうち1点が読みあげられ回答がなされたが、質問に対応しない回答だったため、確認しようと手を挙げたが無視された。

②基本的な作業が欠落している。

検討委員会は、史実検証の客観性を担保する上で不可欠な基本的な作業を行っていない。報告会の雰囲気伝える事例を紹介したい。

【質問⑧】

○ルベルテガのカタカナ表記が採用されているがその根拠となる資料は何か。

【回答⑧／伊従委員】

フランス語表記がRevertégat（最後のeにアクサン・テギュ）ですから、カタカナ表記はルヴェルトガがより発音に正確な表記です。

上記【質問⑧】は筆者が出した。質問回答はHPに掲載された検討委員会公式のものである。「最後のeにアクサン・テギュ」があれば、「ルベルテガ」というカタカナ表記を採用することに異論はないが、筆者が利用する原文資料には「アクサン・テギュ」がついていない（図版③から⑥）。質問の趣旨は、その点を確認するためのもの。つまり、フランス語表記を「Revertégat」と

する根拠資料を尋ねたのである。しかし、回答は「フランス語表記が Revertégat (最後の e にアクサン・テギュ) ですから」と、質問に対応していない。質問趣旨が明確でなければ質問者に確認するべきだが、思い込みで一方的な回答になっている。

ルヴェルトガ紀行文 (原文) はフランスで 1882 年に出版された。その紀行文でルヴェルトガのフランス語に「最後の e にアクサン・テギュ」はない⁽⁵⁾。図版③から⑥は 1882 年に出版された紀行文の “UNE VISITE AUX ILES LOU-TCHOU.” *LE TOUR DU MONDE*, (1882) (『琉球諸島紀行』『世界周遊』1822 年) から、ルヴェルトガのフランス語表記部分を抜き出した。紀行文が掲載された同冊子で「アクサン・テギュ」のある別の単語もあるので、「Revertégat」には意識的に付されていないのである。つまり、1882 年段階の資料では「Revertégat」(最後の e にアクサン・テギュはない) であり、「Revertégat」(最後の e にアクサン・テギュがある) ではない。検討委員会が用いた「最後の e にアクサン・テギュ」の入った「Revertégat」となっている資料やその成立年代を確認するための基礎的な質問だった。

検討委員会は、これまでルヴェルトガ「琉球諸島紀行」の正殿図版の年代や内容を誤読していたため、筆者は図版が写真を基にしていることを指摘し、基写真 (1877 年撮影) の存在を紹介した。その際、原文が「Revertégat」(最後の e にアクサン・テギュはない) であることから、「ルヴェルトガ」の表記を採用した。紀行文を日本語訳した熊谷謙介神奈川大学教授の助言を受け、さらに資料に基づくという歴史の基本原則を踏まえたものである。筆者の写真紹介を受け、検討委員会はルヴェルトガ写真を入手したが、表記は「ルヴェルテガ」を使用し始めた。通常なら、何らかの根拠資料があることとなる。そのため、「Revertégat」の出典を確認するための質問をしたのである。

ここまで説明すれば、伊従委員の回答が、質問の趣旨をすり替えた上、歴史学の基本的ルールを踏まえない資料の利用であることが理解できるだろう。これまで検討

委員会の「史料批判」の不備などを何度も指摘してきたが、今回は基本的作業が欠落していることを指摘せざるをえない。これは一例にすぎない。検討委員会の作業自体が、「学術的」でないのである。

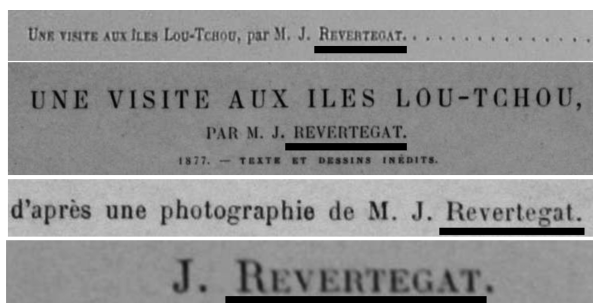
おわりに

検討委員会報告会の概要を簡単に紹介し、問題点を指摘した。検討委員会の作業には、基礎的な「史料批判」などが不足しているだけでなく、論点のすり替え、資料の黙殺やつまみ食いなどが存在している。資料に基づく客観的な作業ではない。その結果、再建される首里城は、歴史上存在しない、創作されたものとなる。それはもはや「復元」ではない。その「復元」には多額の寄附や公費が使われることになっている。

問題を深刻化させているのは、それが資料の制約による「限界」ではなく、史実に対する謙虚さを欠いた作業の結果だという点である。1846 年から 1877 年の間に正面への変更の史実を示せない限り、相対向きはありえない。「令和復元」は「復元」という形を利用した歴史文化の「改ざん」である。検討委員会の社会的、歴史的な責任は重い。

【注】

- (1) 「沖縄タイムス」『琉球新報』(2020 年 11 月 14 日)、「非文字資料研究」23 号 (神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、2021 年) の後田多敦「首里城正殿大龍柱の向きの検討—近代における大龍柱「改変」史から—」(21-45 頁)、熊谷謙介「ジュール・ルヴェルトガ「1877 年の琉球諸島紀行」」(47-56 頁) 参照。
- (2) 総合事務局の HP 中「首里城復元に向けた技術検討委員会 関連」に報告会をはじめ、委員会の記録が掲載されている。
http://www.ogb.go.jp/kaiken/matidukuri/syurijou_hukugen_iinkai
- (3) 後田多敦「ギルマール写真と伊藤勝一収集首里城正殿写真」(『非文字資料研究センター News Letter』46 号、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、2021 年、17-24 頁)
- (4) 「首里城再興研究会」の HP に公開質問状などが掲載されている。
<https://www.shurijo-saikou.net/documents>
- (5) 筆者はルヴェルトガの “UNE VISITE AUX ILES LOU-TCHOU” については、“*LE TOUR DU MONDE 2ME SEMESTRE 1822*” と紀行文の抜刷の 2 種類を所蔵している。この 2 種類とも、最後の e にアクサン・テギュはない。



図版上から③～⑥：③は目次、④本文タイトル、⑤は正殿図版の説明 (図版①の原文の図版説明の一部)、⑥は本文末尾の著者名。いずれもアクサン・テギュはない。下線を引いた部分。